

浄

monthly
JODO
1997・7

土



1997
7
July

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 [年中無休] [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

新潟小千谷

照尊寺

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。

撮影／タカオカ邦彦

見事な荘厳の本堂。現在の本尊は五代目だ

新潟小千谷
照専寺



小千谷の名物は錦鯉、そしてコシヒカリ



照専寺の本尊は五代目。これは
歴代の本尊、阿弥陀如来像



本堂の屋根の下には雪を溶かすための
水場がある。雪国ならではの風景だ



この地方の位牌は仏壇位牌と呼ばれ、飾りも立派で大きい位牌だ

左上が本尊。右上が法然上人像、左下奥が位牌堂になる



寺の裏山にある稲荷大明神



浄土

1997/7月号 目次

カラーグラビア寺院紀行	写真=タカオカ邦彦	3
人生は出会いである	照屋敏勝	8
寺院紀行 小千谷照専寺 浄国寺	真山 剛	16
表紙は語る 灯台 闇を照らす光	岡 克己	25
御法語に聴く		26
若和尚のちょっといい話		31
仏教相談	大室了皓	32
日常仏教語		39
連載小説 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	40
いい加減にしろ		47
続 午後の日差しの中で	吉川英明	48
うまい野菜と料理の話	我田 大	56
Jフォーラム		63
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猓下
表紙撮影=岡 克己
アートディレクション=近藤十四郎



人生は
出会いである

京都文教短期大学教授

照屋敏勝

一、出会いの不思議

人生において「出会い」はとても重要な意味をもっています。だから出会いを強調した言葉がいくつもあるのです。

よく知られた言葉は茶道の「一期一会」^{いちごいちえ}です。茶席において主人と客が一生（一期）に一度会う（一会）ような気持ちでお互いに接心するということのような意味だと思います。

佛教ではこの言葉を逆にしたのも使われます。つまり「一会一期」です。それは一度の出会いが生涯を決定するということになります。人生においてはそういう出会いもあります。私自身の佛教との出会いもそのような出会いだと考えています。

佛教には「欠縁不生」^{けつえんふしやう}という言葉と、「有縁利生」^{うえんりしやう}という言葉があります。前者は縁が欠けると生^{いのち}が生^{いか}されないという意味であり、後者は縁が有^あってこそ生^{いのち}は利^{いか}されるという意味です。佛教は縁^{えん}の宗教ですので、縁がとくに強調されます。ほんとうに人間は縁に依^よって縁に活^{いか}されるのだと思います。

私は一九七六（昭和五一）年から一九八六（昭和六一）年までの十年間沖縄のキリスト教系の大学に勤務しておりました。私はクリスチャンではありませんが、せっかくキリスト教系の学校にご縁ができたのだからと思って、キリスト教を学ぶために毎月の「聖書研

究会」にも出席しておりました。しかし、頭ではキリスト教のすばらしさはわかっていても私の体の奥深くまで入りこんでくることはありませんでした。そして、いつの間にか、私に気がつかないうちに、私のなかに佛教が入りこんでいていました。知らぬ間に佛教にハマえられてしまったという感じてした。縁とはそういうものかも知れません。どこにいても出会うものは出会うものだと思います。

人生は

深い縁えんの

不思議な

出合いだ

(坂村真氏)

二、縁は縁を生ず

佛教大学で佛教を学ぶために、大学をやめることにしました。大きな不安もありました。まわりからは、「地位も身分も安定しているのに、なにをいままさら」と言われました。確かに冒険だとは思いました。扶養家族四人がかえての不安の旅立ちでした。長男が四歳、次男が二歳、長女が十ヶ月でした。私自身も四十代の後半に入っていました。二年間は貯えで生活できてもそのあとの見通しは全くありませんでした。考えれば考えるほど不安が広

がるだけでした。その不安をやわらげ、大きな力と支えを与えてくれたのが次のような言葉でした。

「大事の思案は軽くすべし」

（佐賀藩鍋島家家訓）

「生理的に下り坂になったとき、人生はようやく上り坂となる」

（ヴィクトール・フランクル）

「切に思ふことは必ず遂ぐるなり」

（『正法眼蔵随聞記』）

人間は「大事の思案」は重くするのが常です。そのために決断できなくなります。たしかにあれこれ考えると不安になります。しかし私は、そのために決断しなくて死ぬときに航海するのが嫌だったんです。

四十代の後半は生理的に下り坂になりはじめる時期ですが、むしろそのころから人生はおもしろくなってきたなあと思いました。だからできる時にやりたいことをやっておこうと思いました。私は幼児教育学が専門ですが、せめて佛教山の上り口だけでもみつつけておきたいと思いました。

「意志あれば道あり」といわれるように、人は志があれば道は自ずからひらかれるので

はないかと思っています。

比叡^{ひえ}が峰^{みね}高きに至る道なくも

人が志^{こころ}に道^{みち}は拓^{ひら}きぬ

京都に移って二年間は佛教大学大学院で研究員として自由に学ばせてもらいました。大学院、学部、佛教大学四条センターの諸講座を自由に聴講してよろしいということでした。大変ありがたいことでした。水谷幸正先生（学長）、高橋弘次先生、坪井俊映先生、雲井昭善先生、関山和夫先生などの講座を聴講させてもらいました。たのしい充実した二年間でした。

京都に来てしばらくしてからだん王法林寺の信ヶ原良文師・千恵子御夫妻にお会いしました。だん王法林寺は、袋中上人を通して沖縄とのご縁の深いお寺ですが、御夫妻との出会いは、私のこれまでの人生のなかで最も大きな出会いでした。御夫妻との出会によっていろいろなご縁が広げられていきました。私の再就職のためにも奔走してくださいました。ほんとうにいいご縁をいただいたと思いました。有り難く勿体ないと思いました。

おほけなく縁^{えん}が故^{から}に生かさるる

心に留^とめ来^きしものを選^えりきて

三、佛教との出会い

沖縄の大学をやめて京都に移ることになったとき、多くの団体や研究会や教え子や友人たちが十数回の送別会をしてくれました。そしてその度に質問を受けたのは、「どうしてキリスト教大学から佛教大学に行くのですか」という質問でした。私は、それは「内的なうながし」ですと答えたり、それは佛教という「宿縁」のようなものですと答えたりしました。

佛教とは何でしょうか。

私は佛教はとてもおもしろい宗教だと考えています。これほどの多様性と柔軟性を内包した宗教も珍しいです。佛教の最大の特徴は人類の宗教ではなく万類の宗教だということです。人間だけが対象ではないのです。「悉有佛性」とか、「国土草木悉皆成佛」といわれるように、人類のほかの類も対象になっています。人間は人間中心に考えすぎます。それが地球や環境を破壊し、汚染してきたのです。佛教が地球の救済原理になりうるのはそこるところです。

佛教は境目にとらわれない教えです。宗教というのは本来そうだと思います。人間社会にはたくさんの境目があります。人種、民族、宗教、思想、身分、階級など多くの境目があります。そして人間はその境目にとらわれています。そこから差別や偏見や抑圧も生まれてきます。佛教の諸々の修行は境目にとらわれない訓練であり、鍛錬です。修行を積ん

だ佛教者が境目にとらわれなくなるのはそのためだと思います。

佛教は優劣にとらわれない教えです。万物を優劣で見ないのです。人間も動物も植物もそれぞれが特徴をもっています。人間の知性がすぐれているのは一つの特徴です。犬の嗅覚がすぐれていることや鷹の目がすぐれていることと同じです。蓮が妙華を咲かすことと同じです。しかし、残念ながら佛教者のなかにも優劣でものをみる人々がおります。○○経はすぐれた宗派だと主張します。どの經典もお釈迦さまの教えであれば皆同じ尊さです。どの教派や宗派もそれぞれの理念をもち、それぞれの特徴をもっています。

佛教は比較にとらわれない教えです。人間は比較が大好きです。いろんなところで行うんな比較をします。しかし、比較はちがいを無視したところから生まれてきます。比較はものを認識する手段として有効ですが、それにとらわれることも多いです。比較にとらわれている間は人間は安心できないと思います。ある本のなかで次のような文章に出会いました。「仏法に逢^あって知らされた一番大きなことは、比較して生きなくてもいいという世界があるのだということです。……」このことはとても大事なことです。

佛教は「優劣」を越え、「比較」を越え、「へだたり（境目）」を越えた世界をめざしていきます。それはすべての領域で貫徹される必要があると思います。

日本における佛教は時代の制約や佛教の祖師たちの佛教理解によつて差異や力点のちがいが見られます。

日本における佛教の祖師たちのなかで法然上人は最も民衆的な佛教指導者だったと思ひ

ます。お名前そのものがまさにそうですし、万人に可能な「口称念佛」という方法を採用されたことでもわかります。

法然上人は著書が少なく、残された多くは「口伝」ですが、それはお釈迦さまと同じように徹底した布教者だったということであり、いつも「今」を問題にされていたのだと思います。佛教寺院にしても、佛教の行法ぎょうほうにしても、民衆から浮き出ることを戒めているのはそのためだと思います。そのことは『一枚起請文』のなかの「…一文不知ノ愚鈍のミニナシテ……智者ノふるまいヲせずして、只一向に念佛すべし」という教えのなかによくあらわれています。法然上人は「優秀」ではなく、「適否」（ふさわしいかふさわしくないか）を問題にされていたように思います。

法然上人は「月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ」という道歌でもわかりますように、すぐれた詩人だったと思います。どの分野であっても、すぐれた指導者は豊かな感性と表現力という詩人的要素をもっていることが大切だと思います。

寺院紀行

照專寺

新潟小千谷



撮影 夕力才力邦彦

文真山 剛

新潟県小千谷市にある照専寺。このお寺の通称を「おおてら」と言う。かつて、この照専寺はその寺領からあがってくる年貢米がなんと六百俵。資料は残っていないものの、見渡す限り寺の土地、といった広大な寺だったのだろう。いくら通称とはいえ、「おおてら」という規模は想像し難い寺領だったに違いない。

年貢米といえ、そう、ここ新潟はまさに米どころ。コシヒカリといえ、泣く子もだまる(?) 天下一のお米だ。

そのコシヒカリ、同じ新潟のコシヒカリでも魚沼郡のコシヒカリがよりおいしく、同じ魚沼郡のコシヒカリでも南魚沼郡のコシヒカリがよりおいしく、同じ南魚沼郡でもS町のコシヒカリがよりおいしい、そしてよりおいしいのは……、とは先月号本誌の連載「うまい野菜と料理の話」だが、実は取材前夜に南魚沼郡六日町にあるその著者のお店に行ってきた。メニューにある白いご飯をいただいたが、その美味しさを伝える筆力を持ち合わせないのが残念だ。

この米どころ新潟だが、こんな話を聞いたことがある。米はもともと南方系の植物、品種改良をする前は決しておいしいものではなく、寒い新潟では米は米として食べるよりも酒や煎餅に加工された、という話だ。確かに煎餅メーカーは新潟が多い。銘酒も新潟が多い。



一理ある話かもしれない。

さて新潟を語るとき、特に歴史や風土の話となれば忘れてはならないことがある。それは浄土真宗が広く、そして深く根付いた真宗王国と呼ばれる土地ということである。

ここに一冊の本がある。新潟仏教文化研究会が編集した『なむの大地』——越佐 浄土真宗の歴史——という本だ。実はあまり知られていない話だが、日本で神社仏閣が一番多い県が新潟なのである。新潟の冬は長い。雪に閉ざされた中で人々は何を思うのか。自分の来し方行く末を考えたり、内なる心に思いが向かうに違いない。現代のようにテレビやコンピュータが普及すればそんなこともあるまいが、何も情報のない時代、雪国でも自然に恵まれた新潟の人々が自分を見つめる中で宗教に興味を持つのに不思議はない。浄土真宗の祖師、親鸞聖人、良寛和尚、木食五行明満上人。新潟で多くの僧侶が活躍したのには、こうした風土や土壌があるからに違いない。さて、『なむの大地』の中にこんな資料がある。新潟県の寺院数二千九百七十五か寺のうち、浄土真宗系の寺が千二百二十四か寺（約42%）。次が曹洞宗系で八百十九か寺（約28%）、続いて真言宗系の四百九十一か寺（約17%）で、あとの宗派はいずれも数%で浄土宗は

錦鯉と並ぶ、小千谷の名物、小千谷ちぢみ



八十か寺で約3%しかない。

実はこの数字に照専寺が「おおでら」と呼ばれる理由が隠されているのである。

日光山蓮華王院照専寺は天正二年（一五七四）七月二日、関東から信濃川を下り浄土宗を広め一寺を建立した光蓮社日譽了感上人が出奔したこの日をもって開山としている。三世が伽藍を建立、中興上人となった、中興とはその寺に貢献の大きかった住職に与えられる称号だ。そして第二の中興上人が宝永一年（一七〇四）から宝永七年（一七二〇）の間、この照専寺の住職を務めた第十二世の行蓮社信譽知秀直弁上人だ。直弁上人の功績は、関東十八檀林といわれる浄土宗の大きな学問所の寺からの支援を受け現在の本堂を建立し、新潟における浄土宗の拠点となる寺格と、その礎を作ったことである。

つまり圧倒的に強い浄土真宗の地盤で、この照専寺は多くの浄土宗の僧侶を育て、その僧侶を新潟の中の浄土宗のお寺に送り込む役割を担ったのである。宝永年間の前後は新潟の浄土真宗の寺院が増えている時代で、そうした背景のなか、新潟のちょうど中心にあたる小千谷の照専寺は浄土宗にとっても、果たすべき役割の大きい寺院となったに違いない。



ゆったりと流れる信濃川



見事な千体仏

この弟子育成の伝統は、寺に常時十四、五人、あるいはそれ以上の弟子を、また大正になっても十人前後、そして昭和に入っても五、六人という弟子を抱えていたなど、つい最近まで残っていた。つまり子供のころから預かり、修行させ、一人前の僧侶にして、送り出すという僧侶育成の場であり、まさに北陸の本山照専寺なのである。とはいえ正式には本山ではないわけだが、本山扱いの伝統は今でも残っていて、衣や総本山への納付金などに特別な扱いがあるという。

また、現在の住職は先代の実子だが、それまでは弟子の中の一人が住職を継いできたという。時代のせいかな現在の寺では実子、あるいは養子をもらって継がせることが多いが、先代までは弟子に継がせてきていたのも照専寺の寺格ならではのことなのだろう。

こうした歴史を寺に残る十八檀林が連なった帳面を開きながら話してくれたのが、照専寺第三十五世光蓮社明誉和憲上人だ。

“おおでら”と聞いてから会ったのでは、ちよっと驚いてしまう若い住職だ。先代住職には三人の子息がいる。長男は北大から帯広にある畜産大学の教壇に立ち、次男は慶大から銀行マンとなっている。面白いことにこの二人の息子は共に漢字一字の名前なのである。なぜ面白いかというと、僧侶になるには必ず二文字の名前でなければ

ならない。先代はそれを承知で名前をつけたはずだ。そして三男は和憲。その和憲住職は先代のこんな言葉を覚えていいる。

「後を継ぐ住職はできるだけ歳が離れている方がいい」

高校時代に軟式テニスで北陸三県で優勝、いくつもの大学から推薦入学のあった三男に、先代は「ここだけは譲れない」と大正大学以外の大学への進学を許さなかったという。先代が寺格の高さを、どう考えていたのかは知る由もないが、こうして照専寺初の親から子への住職引き継ぎとなったのである。

住職が高校時代に軟式テニスでペアを組んだ前衛の選手はいまでもテニス関係の仕事に携わっているという。北陸を代表するプレーヤーが僧侶に、しかも三男で。このことについて住職に聞いてみると、「若いころはなんとなく割り切れないものもありましたが、こうして五十歳を目前にしてみると、むしろ良い所に落ち着けたと思います」との答えだった。

さて、小千谷は信濃川という自然の恵みのもと、米、へぎそば、錦鯉、小千谷ちぢみでその名を知られ、さらに伝統行事の闘牛も残っている。豊かな水に育まれた風物はのどかで、そして素朴だ。

しかし自然は優しいだけではない。雪国に雪にまつわる苦労話は

多い。照専寺も雪との闘いがある。昭和五十九年には本堂奥の柱が雪の重さに耐え兼ねて裂けてしまった。それ以後は雪降ろしのための屋上へ水をあげる施設や降ろした雪を溶かす浅いプールのような施設を整備した。また雪の季節にはお墓参りができないために、仏壇位牌と呼ばれるとても立派な位牌がある。本尊の下からつながる本堂裏手のお堂にはその仏壇位牌がずらりと並ぶが、確かに大きい。ものによっては二百万円するというし、塗り直しには四十万〜五十万円もかかるという。まさに仏壇と値段が変わらないことからこう言われているらしい。毎月二十五日に開かれる講には信仰篤き土地柄もあり多くの檀中（檀家をこう呼ぶそうだ）が集まるが、これも十一月から三月は休みだそうだ。どれも雪国ならではの話である。最後に本尊の話を。というのも、なんと現在の本尊は五代目だという。しかも初代から四代目までを火事などの災害で失った、というわけではない。初代の阿弥陀さまはかつての住職が弟子にゆずり、現在は長野の寺の本尊になっている。二代目は檀中の自宅での葬儀式の時に出張する厨子入りの阿弥陀さまで、三代目は境内に建つ法音蔵に奉られ、四代目は境内にある末寺の宝珠庵の本尊になっている。普通、本尊は代を重ねないだけに珍しいが、これも「おおてら」

境内にある歴代上人の墓



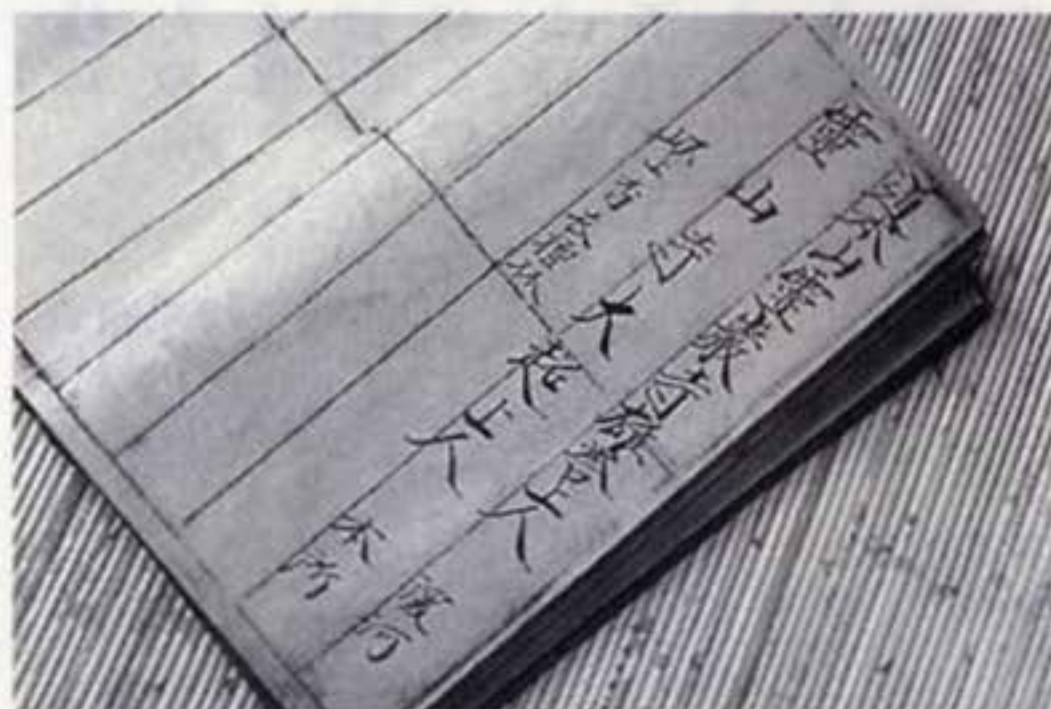
歴代上人の略歴帳。代々弟子が継ぐお寺だった



ならではのことなのかもしれない。

こうした何体もの阿弥陀さまのほかにも厨子入りの阿弥陀さまがあり、檀中の自宅葬に出向くが、こうした仏はもちろん、本堂の簡単な塗り直しや修繕は住職自らが行うという。北陸本山の伽藍の歴史は「雪国の寺は雪から伽藍を守るのが大切な役割」と自らのなすべき事を語る和憲住職の手、本当のその手によって護られている。

(ルポライター)



関東十八檀林の名前が列記されている帳面

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

灯台

長い歳月を越えて
聳え立つ塔

7月

にゅうどうざき

入道崎灯台(秋田県)

入道崎灯台は男鹿半島の入道崎にあります。1898(明治31)年11月1日に初点灯。現在の灯台は1951(昭和26)年に改築されたものです。位置/北緯40度00分09秒、東経139度42分18秒。黒白横しま、円形、コンクリート造り。閃白色、毎15秒に1閃光。光度150万カンデラ。光達距離20海里(約37km)。高さ27.9m。灯高(平均水面上から光の中心までの高さ)57m。内部を見学できる灯台(犬吠崎、観音崎など全国に11カ所ある)。



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された『水のある風景』が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』(発売/ジェイ・ブレジデント)として好評発売中!!

御法語に聴く

人々ノ堂ヲツクリ、仏ヲツクリ、經ヲカキ、
僧ヲ供養セム事ハ、ココロミダレズシテ、信
ヲオコシテ、カクノゴトキノ雜善根^{ぞうぜんこん}ヲモ、修
セサセタマヘト、御ススメ候ベシ。

『鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事』

人々がお堂を建て、仏像を造り、写経をし、
僧侶に供養すること、心乱れることなく往
生浄土の願いが甞るのであれば、お念仏以外
のこうしたさまざまな善い行為をなさっても
構いません、とお勧めになつて下さい。

お施餓鬼く塔姿廻向の心く

七月。暑い季節がやってきました。自坊のある横浜周辺の多くの寺院ではこの時期にお施餓鬼をおつとめしています。本来お施餓鬼は、時節を限らない行事だったのですが、お盆の行事と習合し、「盆施餓鬼」などといってその前後に行われるようになりました。日中、本堂を開け放って風を入れながらの法要ですからこんな句も詠まりました。

施餓鬼棚（せがきだな） 風にころげる もののあり（昭彦）

お施餓鬼といえは連想するのがお塔婆でしょう。大きなお寺さんでは塔婆廻向（とうばえこう）は法要のクライマックスです。

お塔婆とは、もともと古代インドの言葉で、「土を饅頭（まんじゅう）型に盛り上げた墓」を表す卒塔婆（そとうば）、ストウパーの音

写でした。インドでは、お釈迦さまの入滅後、その遺骨である仏舍利（ぶっしやり）をまつて煉瓦などで塔が建てられ、中国や日本でも仏舍利をまつた三重の塔や五重の塔が多く建てられました。

こうした塔を作ることは尊い行であり、素晴らしい功德があるからです。本来は、こうした仏舍利をまつた塔がお塔婆でした。

けれども時代を経ると、それが五輪を型どった細長い板で作られ、すべての尊い功德をおさめて、ご廻向を手向ける方のお戒名などと、それぞれの施主の名前を記し、法要を通じて亡き人へ廻向の誠を捧げ、それぞれのお墓に建てられるようになりました。今ではお塔婆といえ、本来の仏舍利をまつた塔というよりも、この細長い板を指す方が一般的になってしまいました。

こうしたお塔婆により、亡き人を思い、追善（ついぜん）する志のある人ならば多くの人にそれが叶うようになりました。本来の塔

婆の意味であつた立派な塔を建てることなど、たとえその功德が素晴らしいものであつたとしても誰しにもそれが叶うはずもありません。法然上人も「立派な塔や仏像を作ること（造像起塔）などは、多くの人には望めない行です（『選択集』）」とおっしゃられています。多くの方がそれぞれにお塔婆をご供養できることの有り難さを忘れてはならないでしょう。

ところで法然上人は、「ただ一向に念仏すべし」とおっしゃられました。もっぱらお念仏をお称えることとお塔婆を建てることとはどんな関係があるのでしょうか。「塔婆」の言葉こそ見えませんが、法然上人は冒頭のようなお言葉をお手紙の中で遺して下さっています。

お塔婆を建て、亡き人が私たちを持つお浄土へ廻向の誠を捧げることによつて、私たちの心の中に、「阿弥陀さまのお浄土へ往生させ

ていただきたい、そんな願いが発（おこ）るのであれば、法然上人もお塔婆を建てる私たちにきつと微笑（ほほえ）みかけて下さることでありましょう。

卒塔婆（そとば）抱き 人散りゆけり 施餓鬼寺（洋子）

合掌。

（浄土宗総合研究所研究員・林田康順）

電車に乗ってまず目に飛び込んでくるのは、これでもかと言わんばかりに趣向を凝らしたおびただしい数の広告。中でも、^レ旅に関するものは、相当多く見受けられます。

ところで、旅の目的は人さまざま。「あの場所に行ってみた」という観光目的型がやはり大多数でしょうが、それと背中合わせなのが、「とりあえず場所はさておきパターン化した毎日から、たとえ一時でも離れた」という日常脱出型。どうですか皆さん。案外、多いのではないでしようか、この指向性。

同じようなカタチで明け暮れていく毎日。それが長年続いていくと……
「これでいいのだろうか……」

若和尚の

其二十六 し な は い い ト ツ ヨ チ

ある日突然、こんな疑問が湧いてきて自己嫌悪に陥ったり。

でも、ちよつと待って！

この、自分への革新的問いかけは、それはそれで大変イイことではあります。そういったところから、向上、進歩のドラマは始まるのですから。しかし、それは同時に、日常に対する否定的な意味を多分に含んでいるということにお気づきでしようか。

我が目にはワンパターンとかマンネリとか映っていた日常かもしれない。しかし、何か違ったこと、新しいことを始めるよりも、ワンパターン、マンネリを守っていくことのほうが、もしかするとより難しく、勇気のいることかもしれない。マンネリの日常が生み出している

もの、それによる恩恵なくしては、私たちの生活は成り立たないのですから。大いなるマンネリ、結構じゃないですか。

「なんか、おもしろえことねえかなあ……」

あるわけありませんよ、そんなこと。

それより、もう少し「脚下照顧」。否定的色眼鏡で見ていた毎日の中にも、きっと新しい価値が再発見できるはずですよ。

ワンパターン、マンネリ脱出は、そのあとでも遅くないかも。「あーあ、疲れた。やっぱり家が一番だ」

誰ですか、あんなに脱日常をとなえていたくせに、せっかくの旅行から帰ってくるなりボヤいているのは？

(正)



刑事事件における「死刑」についてどう思われますか。

馬鹿な質問だと思われるかもしれませんが、安直に答の出るものではないことは十分に察しております。

去る四月十四日、連続幼女殺人被疑者に死刑の判決が出ました。

彼は犯罪そのものを「夢のようだ」と言っています。「夢のよう」に幼女を殺してしまうとは本当に悪以外のなにものでもないし、判決の通り「同情の余地」など全くないと思います。

しかしこの「死刑判決」は本当に妥当な極刑であるかどうか、私には疑問が残ります。

死刑よりも、それ以上の厳しい刑罰に処すべきではないでしょうか。

彼は事実関係は認めているが、十分な慙愧悔恨の念を自分の人生の中に見つけ出していない。そして「死刑」の判決に対してもそれを先刻承知であるかのように平然としてい

るといいます。

こんな男が殺されて、それによって憎んでも憎み足りない重罪がいつも簡単に、たやすく帳消しにされて良いものでしょうか。

鋸引きにしてもなお足りない怒る人もあらうかと思います。

彼には死刑よりも、もっと極刑として宗教で言う「懺悔」の心にのたうちまわる日々を、命ある限り送らせることによって、犯した罪を償わせるべきではないかと思います。

残酷な殺人を犯しても「死ぬことが怖くなければ、何人殺しても構わない」ということにもなりかねないだろうと思います。

被害を受けた童女たちのご両親の痛恨の気持ちは察するに余りあるものがあります。

この事に関しては、法律家や法社会学者の意見よりも、宗教者であり、日頃「慈悲」とか「救済」を解釈し、説いておられる方々のご意見を拝聴したいと切に思っています。

(吹田市 会社員)



大宮

殺人者の手には、殺された被害者の恨みの血がベツトリ染み付いています。

石鹼でいくら洗っても拭い取れるものではありません。

まして何の罪もない幼い子の血は、殺人者の体の奥深くまで染み込んでいます。

その血を洗い清めることは決して容易なことではありません。

殺人者は、命を奪ったのですから、自分もまた命をかけて償いをしなければ、恨みの血は消えないだろうと思います。

そう考えますと、命を奪った代償に、己が命を絶つ、それが自分で出来ない、そうした罪の自覚がないとすれば、国家の権力による「死刑」は当然だと思ふ人が少なくないでしよう。

しかし私は仏教を奉じる一人として、自分が生きるためにはやむを得ないこともありませんが、殺生戒を犯すことは固く戒めています。

まして人を殺すなどということは絶対に許しません。

従つて、国家権力の行為としての殺人である「死刑」には反対の立場に立っています。

さて、お釈迦様は殺人犯に対して、どのような処罰をされたでしょうか。

有名な話をご紹介します。

お釈迦様のお弟子にアングリマールという青年がいました。彼がお弟子になる前は、バラモンの学者に師事して学問に励み、師もまたわが子のように可愛がっていました。

だが美貌であつたがために、師の夫人にしつこく言い寄られていました。しかし神とも仰ぐ師を裏切ることができずこれを拒絶し続けていました。

これを恨んだ夫人は、彼が犯そうとしたと夫に訴えました。

裏切り者よ、と怒った師匠は、

「汝の修行は終わった。あと一つを残すだけ

だ。それは街に行って百人の男女を殺し、その死体から指を一本ずつ切り落とし、百の指で首飾りを作れ。これが最後の修行である」と厳命しました。

初めは迷いましたが、師の命に従って殺人鬼となった彼は人を殺しまくった結果、人々は恐れて、誰も外出しなくなり、死の街のように静まり返ってしまいました。九十九人まで殺しあと一人となった時、彼の目に僧の姿が見えました。

これが最後だと喜んで飛び掛かろうとしましたが、距離は一向に縮まりません。

「停れ、停れ……」

この僧とは誰だろうお釈迦様でした。

殺人者の横行を耳にされ、危険です、と言う弟子たちの諫めの言葉を聞き流して街に出られたのです。

「アングリマールよ、私は停っている。何を焦っているのか」

その犯し難く尊いお姿に感動して、彼は自分の誤りに気付く

「お釈迦様、私はあなたに帰依します。どうぞお導き下さい」

とお願いました。

教えに従って、心を改め街に托鉢に出るようになりましたが、肉親を殺された人々は憎悪の目で眺め、唾を吐き付け、石や瓦を投げつけたりしましたので、毎日毎日血みどろになつて帰ってきました。

その姿をご覧になって、諭されました。

「アングリマールよ、よく耐え忍びなさい。

お前の作った悪行の報いは、いまそれを受けねばならない。よく耐え忍ぶ時、悪行は少しずつ消えていくのだ」

悪逆無道だったアングリマールに、死んで詫びよ、今で言うところの「死刑」の宣告はされませんでした。だが彼にとっての日々は死刑よりも辛いものではなかったでしょう。

さて以下は貴方の質問へのお答えです。

世間では「死刑」は極刑だと考えられていますが、この幼女殺人者は極刑と認識したかどうか。彼にとっては「死刑」は安易な判決であつたのではなからうか。むしろ終身刑を科し、命ある限り罪の意識に悩ませ、深い後悔にのたうち回る日々を送らせるべきだ、と貴方はお考えのようです。

私は貴方と同じかも知れませんが、ただ独房に収容するだけでなく、血の出るような極めて過酷な肉体労働を科して、より健全な世の中を造るための社会貢献をさせる。

その一方では、懺悔の心を持って亡き被害者の供養に生涯を捧げさせることが出来ればと考えます。

しかしそのようにさせるのは容易なことではありません。

私は教悔師として、ある刑務所で刑に服している人達の指導をしていますから、刑務所

の現状を少しは知っていますが、どのような組織で誰が指導に当たるかには極めて難しい課題です。

私の所属している刑務所では、犯罪者の中で特に外人の急増には驚いています。数年前には二百四十人程でしたが、現在は四百人以上にもなっています。言語は二十六ヶ国語以上にもなっていますので、刑務所員の労苦には敬服せざるを得ません。

増築すれば、増員すれば、組織を改変すれば解決しようものを、などは机上の言葉です。それが簡単に出来れば、貴方のまた私の思うようになるかも知れませんが、極めて困難なことです。

さてここで、外国の「死刑」について簡単にお知らせしましょう。

カナダでは死刑は国家殺人という考えが広く国民の支持を得て廃止されています。また死刑と犯罪抑止は関係ないとも言われています。

す。しかし復活論も盛んです。

アメリカでは、廃止されていましたが二十数年前に復活しました。死刑囚が三千人以上となって刑務所に収容出来なくなりました。治安悪化が進んで来たのです。

ロシアではエリツイン政権が死刑廃止を宣言しましたが、世界での犯罪大国となった現在、無期刑にしたら多くの凶悪犯を税金で賄う収容費の増大は許さない、として国民の九割が廃止に反対しています。

中国では、「死刑」は犯罪を抑止するとして行われています。他国と違うのは、判決から死刑執行までの時間が極めて早いと言われていることです。

執行件数は減らすように努めるが、絶対に死刑制度は廃止すべきではないというのが、政府の考えです。

フィリッピンでは、十年前ごろ死刑制度は廃止されましたが、三年前から復活しました。

しかし死刑判決はされても、執行はされていないようです。

また死刑判決に対して、「優秀な弁護士を雇えない貧しい被告ばかりが死刑判決を受けた」と指摘する声も上がっています。

昔の日本はどうしていたでしょうか。

江戸時代、江戸の有名な刑場であった「小塚原」では二十万人が処刑されたと聞いています。

一年のうち二百日ちかくが休日だったそうですから、一日当たり十人あるいはそれ以上が処刑されていたでしょう。

遺体の埋葬や供養は許されませんでした。

軽く砂をかける程度で放置されました。

野犬や鳥などに食い荒らされる悲惨な状態だったようです。

夏などは鼻をつくような異臭が辺り一面を覆っていたでしょう。

その光景を見た庶民はどんな思いを抱いた

でしようか。

鈴が森も刑場でした。小塚原ほどではなかったようですが、やはり多くの処刑が行われました。

日本全国では想像もできない多数の処刑があったろうと考えられます。

市中引き回し、火あぶりの刑、さらし首な

ど今の死刑よりも、当人にとってはずっと辛いものでした。

江戸時代は、現在とは比較にならない程の恐怖政治が行われていたことになります。

それによって犯罪を抑止することが出来た、と言われていますが……。

■伝承の技と心

念珠



念珠の修理・仕立替承ります。

○アクセサリーの修理・加工・リフォームも承ります。

◆カタログをご請求下さい。
「念珠年報」をお届け致します。



平野屋

本店 東京都文京区湯島4-5-3
☎(03)3811-4450 〒113

四谷店 東京都新宿区四谷2-8
☎(03)3355-2250 〒160

「やはり娑婆の空気はうまいなあ」とは、映画やテレビでは決まって、刑務所から出てきた人が言うセリフです。

自由を束縛されていたものが、外の自由な世界のことを「娑婆」と呼んでいます。ですから何も刑務所に限らないでも、自由が束縛されている状態の人は、良くこの言葉を使います。

また「娑婆で見た弥三郎」などという言い方もします。これは知ってる人にあっても知らない振りをすることを言うそうで、

ある僧侶が入定するふりをして、姿をくらましたところ、以前に召し使っていた弥三郎という男と会って、初めのうちは知らぬふりをしていたがそれもできなくなり、言ったセリフだそうです。つまり死んで死後の世界に行った者が、生きていた世界のことを「娑婆」というわけです。この「娑婆」という言葉、もともとはまぎれもない仏教から出た言葉です。一般的には原語は、サーハーの音訳と言われています。意味としては、「忍土」、

娑婆

しゃば

「耐え忍ぶ土地」と訳され、この世界が人間同志の葛藤や天候、自然などの種々の苦悩を耐え忍んで行かなければならない土地である、理解することとなっています。

つまり「娑婆」は、「この世界」「この現実の世界」という意味です。「娑婆」は欲の支配する世界であり、快樂の世界です。それをほしいものとして求めていても、苦悩しか生まれないと解くのが仏教です。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六二五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三

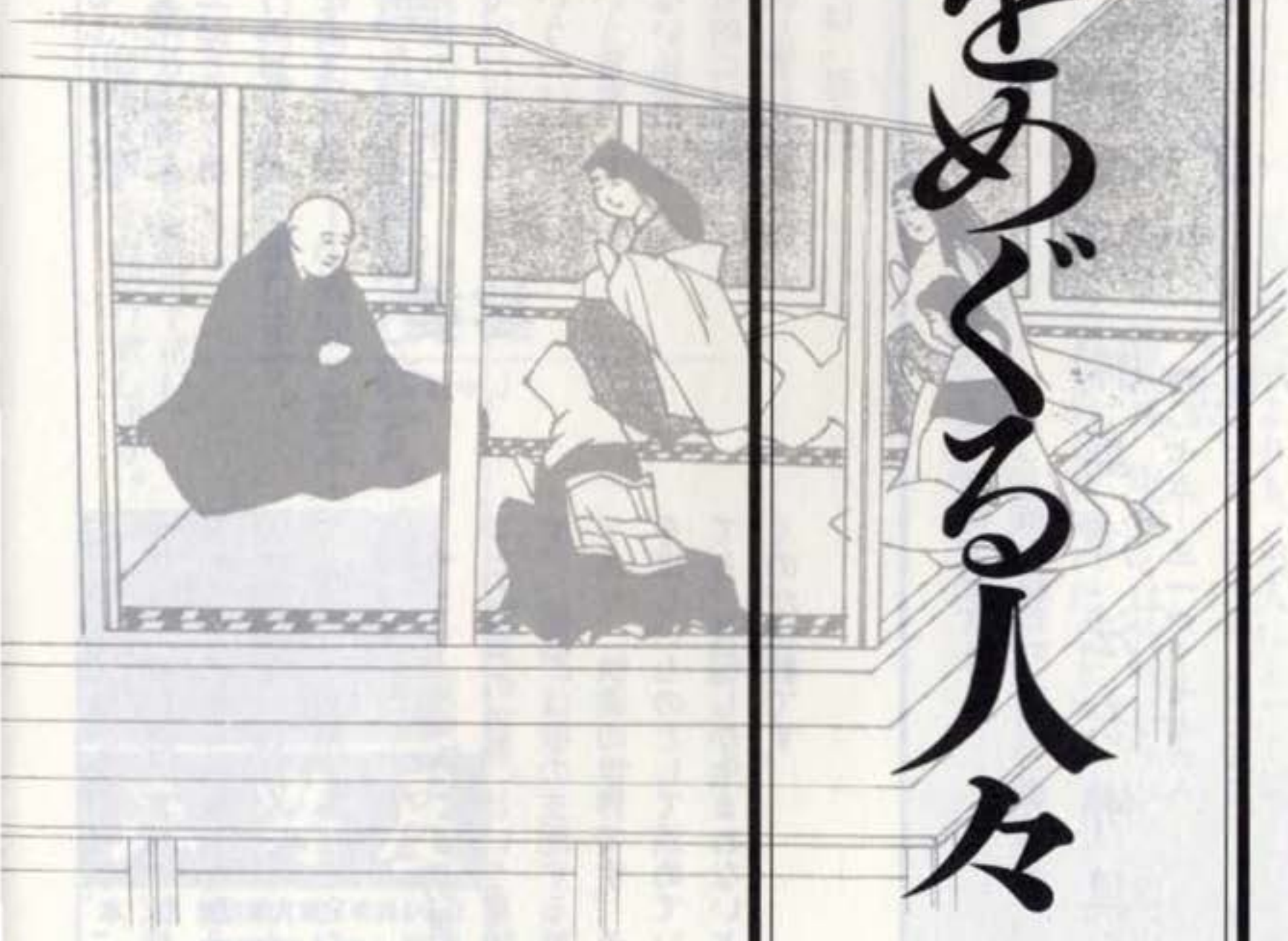
連載小説

法然上人をめぐる人々

【第六回】

漁師と遊女たち

石丸晶子



三

翌日、二月十九日の朝、伏見の旅宿を出た代官と梅菊は、法然の住房に向かう道を急いでいた。

小松谷に近づくにつれ、同じ方向へ向かう人々の数がふえていく。

侍や、稚児ちごをつれた僧侶。尼婆の老女や町屋の男女。被衣姿かっぎの女房は、ふくろはぎが丸見えなのも忘れたふうで、衣の裾すそをからげ、急ぎ足である。

いずれ、身分高い公卿衆の誰かであろう、若い従者たちにかつがれた輿こしが、代官と梅菊が歩みいく小路の曲り角に現われ、住房に向かう人々の群れの中にまぎれていった。

「あれっ、そこに行くのは生口いくぐち荘の代官さまと梅菊ではありませぬか」

うしろで声がした。代官と梅菊が同時にふり返ると、梅菊は、

「まあ、乙さん」

高砂の漁師、乙吉に亀に五助であつた。三人は、同じ小舟を代りあつて漕いで、きのう、京にやつて来たのである。

「おお、これは思わぬところで顔をみるな。また、京で商いか」

立ち止まると代官も声をかけた。

「へい。きのうから商いに、こちらへ参つておりますんで」

と乙吉は代官の横に並んで歩きながら、

「それが京に来てみると、今しがた法然さまが、上皇さまのお怒りにふれて流罪に決まつた、というではありませぬか。で、その話を聞くや、もう魚籠いさごも魚も放り投げ、気がつく」と小松谷に走つていやした」

代官は頷いて、

「全くだ。われらとても同じことよ。お役目で上洛したが、院の御裁定のことを耳にする」と、そのままじつとなどしはおれんでのう。梅菊もつれて、お上人を拝しに行くところじや」

「わしはきのうも法然さまのお姿を拝しやしたが、夜、旅宿に帰って亀と五助に話しますと、二人ともぜひにというんで、今朝はこの通り、三人で参りやした」

「おお、お姿を拝したか。で、どんなご様子であられた、法然さまは」

「わしが参りやしたのは、もう暮れがたでありましたが、お庭には大勢の町屋の衆がつめかけておりました」

「いかにも、のう」

「奥では、法然さまを囲んで大勢のお弟子がたがおられたようで。しかし、何しろわれらは御房の外にいて、内のようにすはよく見えませぬ」

「ふむ」

「すると法然さまは御住房の廂きょうはし（廊下）に立たれて、わしら庭におる者にお話をされたのでございます」

「聞かせてくれ、どんなご様子であられたか、法然さまは」

乙吉は歩みを止め、陽灼けした顔に深い感動のいろを浮かべて代官をみつめた。

「平生と全く変わらぬようにお見うけいたしました。われらはみ仏の姿を拝したのです。どんなご様子であられたかと殿にいわれて、わしはみ仏を仰ぎ見たとより、いいようがありませぬ」

四

法然が、前年の七月から移り住んでいる小松谷一帯は、当時、その名の通り小松が多いことで知られていた。

だが、小松が多いとはいえ、住房の一隅には高く伸びた大木も何本か枝を拡げていて、小松谷に移って間もないある夜、松の枝間から皎々と射し入る月光を賞でた法然はこんな一首を詠んでいる。

小松とは たれかいひけむ おぼつか 覚束な
雲をささえる 高松の木を

代官と乙吉たちの一行がその小松谷に着いたとき、住房のまわりにはすてにかなりの人々が押しかけていた。みな、肅然として、大声で話す者もないのは、心が悲しみに閉ざされているからである。

代官に梅菊、乙吉、そして亀に五助の五人は、庭の隅の岩の上に立って、法然が姿を見せるのを待った。ここだと、住房からは遠くなるが、明け放たれた室内の様子がよく見えるのである。

住房の中にも、お弟子や公卿たちがつめかけている。だが法然の姿は、五人には見えなかった。

と突然、人垣の外で罵声がしたと思うや、バラバラッと小石が住房めがけて投げつけられ、一段と大きな罵り声とともに、数人の男が逃げていった。

五人がハッとすると同時に、
「やめろッ」

「逃がすなッ」

という鋭い声がおこり、集まった人々がざわめきだした。

とそのとき、

「お静まりなされ」

という落ち着いた大きな声がして、きこはし廂にしつかりした足どりで法然が姿を現わした。

若い頃はさぞやと思う、骨組みの大きい、豊かな体軀。

その頑丈であつたに違いない大きな豊かな体軀は、七十五歳を迎えた今、さすがに、どこか老いの翳をかげり漂わせているとはいえ、何という穏やかな慈愛と、犯しがたい氣品にあふれていることであろう。

あつというどよめきが、庭全体に広がったと、またたくうちに、どよめきは水を打ったような静けさに変わっていった。

「怒ってはなりません」

住房をとり囲む人々に、法然は慈愛にあふれる視線を一巡させた。

おお、その声、その姿――。人々は我を忘

れ、ただ法然に心奪われて見入っている。

「朝早くからのお尋ね。うれしく忝かたじけなく思
います。住房狭く、みな様を室内にお迎えて
きませぬこと、お許しください」

法然のことばがひびいた。

「きのう、院の仰せにより、私は土佐に赴く
ことになりました。これもみな仏恩です。み
な様との名残には尽きないものがありますが、
私はよろこんでいます。土佐の人々に聖教を
伝えることができるのですから」

あちこちから、啜り泣きの声がきこえてく
る。

廂の近くに立つ、物売り風の男が声をあげ
た。

「土佐の人間がよろこんでも、京のわしらは
悲しい。法然さま、どうか院に詫わびを入れて、
行かんでください。これから、わしらはどう
なるのか」

その訴えに勢いづいたのか、人々の中から
一斉にさまざまな声がわきおこった。

「どうかどうか、いつまでも京にいてくださ
れ」

「み仏はなぜ助けてはくださらぬ」

「そうだそうだ、わしらも法然さまと一緒に
土佐にいこう」

「叡山じゃ、叡山が悪いのじゃ」

五

「静かに、静かに。お静まりなされ」ふたた
び法然の声がひびいた。

「私のことをそこまで思ってくださいるのであ
れば、私の心を知ってくださいさなければなり
ませぬ」

温い、しかし毅然とした声であった。はっ
と何かに打たれたように、ふたたび、集まっ
た人々は静まっていった。

「私の身はいずこにあらうとも、私の心は、
お念仏の声のするところにあります。阿弥陀
仏により縋り、名号をお称えするみな様の上
にあるのです。どうか、このことを信じて、

弥陀の国で再会しましょう。」

啜り泣きの声がわきおこる。代官も、梅菊も、乙吉も、亀も、五助も、泣いていた。

「お上人さま」

誰かが、涙で声をつまらせながら訴えている。

「お役人や上皇さまの前では、お念仏をやめると仰せられ、お心の中だけで、こっそりお称えすることにして頂くことは出来ますまいか。嘘も方便と申しまする」

法然の表情にはのかな微笑がうかび、その眼差しに、一段と深い慈愛の光が宿った。実はきのうも弟子の法蓮房や西阿が、同じようなことを法然に申し出て、きついお叱りを受けているのだ。窮すれば、人はみな同じようなことを考える――。

「それはなりませぬ」

法然は慈愛にみちた眼差しで、声のしたほうに顔を向けると、

「病人に対してならば、時に嘘も方便がある

やもしれませぬ。しかし、聖教の前に嘘も方便ということはないのです。まことの道を否むことは、弥陀のみ心にそむくことになりましょうぞ」

「じやが、法然さまが土佐にいかれると、わしらはこれから何に縋って生きてゆけばよいかわかりませぬ」

男はなおも掻きくどいた。

「お念仏にお縋りなされ。私にではなく、縋るのはお念仏なのです。私もまた、お念仏に縋って生きて来たのです」

それは身内から光明が溢れているとしか言えないような法然の姿であった。その姿を見、そのことを聞く人々の心に、そのとき、潮のように平和なよろこびがひたひたと押しよせて来た。

「たとえ遠くはなれていても、お念仏の声のするところに、私はおります。私もたえず、なむあみだ仏、と称えているのですから。み仏の国の心の輪が、土佐の人々までも広がる

薰香 線香 經典 念珠

豊田愛山堂老舗

浄土宗総本山知恩院御用達

※地方発送受賜ります。

京都・祇園

TEL(075)551-2221番(代)
FAX(075)525-1806番

のを、どうかよろこんで頂きたい。このたびの土佐への流罪は、まことの教えが、京洛や畿内にとどまらず、日本全国に広まるのを望まれる、まこと、弥陀仏の慈悲の賜物、たまものと私には思われます」

法然は深々とした愛情をこめて、集まった人々に視線を注いだ。早春のやわらかな陽ざしが、人々を、そして法然その人を、穏やかに包み、ときどき、あるかなしかの微風が、花の香りをあたりに運んでくる。

その香りの中で法然はつづけた。

「そして私たちは、日々、お念仏に励み、みな、一人も洩れずに、弥陀仏が待つみ仏の国

で再会しましょう。この世の別れは、しばしの別れにすぎません」

集まった人々の口から、そのとき、誰からともなく、一斉になむあみだ仏の声が湧きおこって来た。

「なむあみだ仏」

「なむあみだ仏」

岩から下り、代官も、遊女も、乙吉も、亀も、五助も、そして小松谷に集まった人々は誰もみな、ゆえ知らぬ深い平和とよろこびに包まれて、松のみどり映える住房の法然を囲み、一心に名号を称えていた。

(つづく)

おかげさまで

410
周年

伝統が支える

信用と技術



松井建設株式会社

本社：東京都中央区新川一・二七・二二 TEL (03) 3553-1151
 東京支店：東京都中央区新川一・二七・二二 TEL (03) 3553-1171
 支店：大阪・名古屋・北陸・北海道・東北・九州・横浜

『失楽園』という本がベストセラーになり、その映画化されたものが話題となっている。そしてテレビ番組にもなるという。新聞の映画広告を見ると、見た人の感想として、その愛の美しさとか深さに感動した、というようなことが書かれている。

読んでみた。

冗談じゃない。筋は単なる自分勝手な不倫物語ではないか。文学として、人間の愛欲の強さや、それにともなう苦しさ、また人間の欲望の前での弱さなど

がよく描きだされ、まさにお釈迦さまが説いた愛も苦であることがよく分かる。

しかし、いま世間でこの本や映画で騒いでいるのは、文学的な読み取りではなく、不倫を愛していれば、的に肯定してしまう、恋愛至上主義的なものの見方や性描写である。

「こんな不倫だったらしてみたい」

街角アンケートのようなものに中年婦人が答えていた。

ふざけたこと言うんじゃない

いい加減にしろ⑨

ませんよ。アホはすぐこうなるから恐い。

不倫が良いことではないことぐらい、誰でもわかっていることではないのか。他者を苦しませて、自分だけが幸せになれるとでも思っているのか。

いま、不倫だとか援助交際だとか、女性の性意識がとくに乱れていると思う。こんなの一部の人のこと、などとのんびりしてはいけけない。悪は悪だという、しっかりした考え方を教えることが大切だ。

続

午後の日差しの中で

最終回

時の流れ

吉川英明



娘が嫁に行く。

嫁に行くという言い方は古いのかもしれないが、娘の場合、やはり「結婚する」と言うよりもびったりとくる。

息子が結婚するのとは違って、娘はその日から他所の人間になるからだろう。戸籍が移り、姓が変わる。

結婚式はこの秋で、娘はその時二十六になっている。

人に言うとき、誰もが申し合わせたように、

「淋しくなりますねえ」

と口を揃える。

だが、今のところそんな気はしない。むしろ、一つ肩の荷が下りた……というのが実感である。

というのも、以前ここに書いたように、私は娘が十八歳のとき妻と離婚した。

離婚の原因は、大雑把な言い方をすれば性格の不一致というやつだ。

性格の違い方にも色々あろうが、我々夫婦

の場合、つまるところ価値観の違いである。

日ごろの生活の中で、私が大切にしたい諸々の事柄が妻にとってではさしたる価値がなく、逆に妻が格別に拘りたいような物事は、私にはあまり興味がなかったのだ。

初めのうちこそ、注文を付け合っていたものの、それを諦めると日常ことごとくすれ違ふ。その距離が十年、十五年と年を経るに従って広がっていき、ついには修復できない亀裂となった。

念願の仕事を持ち始めた妻が家を出て、三ヶ月ほどの別居の後正式に離婚した。

「家庭」は私が大切にしたい物の一つだった。自然、息子と娘は私の許に残って、親子三人の生活が始まった。

離婚によって、私は子供たちに大きな負い目を背負ったと思った。

私と妻とは、二人だけの都合で、子供たちに、突然母親不在の変則的な家庭を強いたのである。

もちろん、子供たちが妻に会いに行くのは自由だったから、娘なども開けっぴろげに、「今日は、ママの誕生日だから、お兄ちゃんと三人で食事してくる」

などと、出かけたりもしていた。

二人ともまだ学生である。日常の生活から母親のいなくなった空ろな部分のうちで、私が埋める事の出来るのは、食事を作ってやることぐらいだった。

料理が趣味の一つでもある私には、食事を作ることは少しも苦ではなく、楽しくさえあった。だから一時期、色々と趣向を凝らしては週に三度は晩飯を作っていたものだった。私の料理は、子供たちにもその友人たちにも比較的評判がよかった。悦に入った私は、いよいよ腕によりをかけた。

だが、今になって振り返ってみるとそれは、心の底に潜んでいる自らの負い目への免罪符としての行為でもあったのではないかという気がしてくる。

今では、食事は娘が作ってくれる。私の作る味の系統とはちよつと違うが、娘もいつしか、かなりの料理好きになっていた。

大分、説明が長くなってしまったが、そんなにいきさつがあるものだから、今度娘の婚約が本決まりになっても、淋しいというより、何となく親の責任をひとまず済ませたという、ほつとした気分の方が強いのである。

だが、周りの連中にそう言っても、素直には受け取ってくれない。

「いやあ、まだ実感が湧かないだけだよ。段々淋しくなるぞ、これから……」

中にはしつこい奴がいて、どうしても私に淋しいと言わせたいらしく、色々な事例を挙げて暗示にかけようとする。

「やっぱ、娘となると、息子とは違うからな。他人に盗られちゃったって気がするだろう……え？　え？」

酔いが回ってくると、そのしつこさも増してくる。



イラスト・平野 稔

確かに、娘のボーイフレンドとは口も利きたくないとか、顔も見たくないと言っていた男が私の周囲にもいたし、娘の友人の間にも同じような反応を示す父親が少なくないという。この酔っ払いが言うように、男親にも、娘を盗られるという、母親が息子の嫁に抱くのと同じ種類の、嫉妬に似た感情が働くのだろう。私には、今のところそれはない。

だが、こちらが別にそんな気はしないと云つても、酔っ払いは承知しない。

「やせ我慢したって、俺には分かるよ。お前さんの性格から言つて、淋しくないわけがななんだ……それに、お前んとこなんか、かみさんと別れちゃってるから、なお可哀相だな。娘は子供が出来ても、親父一人のそこへなんか寄りつかねえぞ。へっ、孫の顔も見られねえんだ。ざまあ見ろ」

挙げ句の果ては、捨てぜりふにそう毒づいて帰って行く。

私も酔った勢いで、

「こつちだって、びいびい泣いてる餓鬼連れて、そう度々やって来られたんじや、たまらねえや」

と、そいつの背中にそう怒鳴り返したが、考えてみれば、そいつの言うとおり、娘の嫁入りということがまだ実感として迫ってきていないのは確かなのだ。

ところが先日、夕飯が出来たと娘に呼ばれて階下に降りていったら、

「きれいでしょう？」

と、娘が左手を挙げて見せた。

薬指にダイヤの指輪が光っている。注文してあった婚約指輪が、今日出来てきたのだという。

「おう、きれいだね。なかなか品のいい指輪じゃないか」

そう誉めたが、食事の間も、娘の指にぼつんと留まったその光がいやに目に付いた。

娘は嬉々として、しゃべりながら食べている。気のせいかな、彼女の腕の動きさえいつもよ

り軽やかで、そのたびに電球の光を受けて指輪がきらめく。

（そうなんだ。こいつはもうすぐ嫁に行くんだ）

酔っ払いの友人が言った「実感」というやつが、次第に頭をもたげてくる。

そうすると、臍の下までずり落ちたスカートをはいて、ちょこまかしていた娘の幼い姿なども目に浮かんできて、近頃大分飲めるようになったビールのグラスを、いっぱしの格好で傾けている横顔に重なる。

赤ん坊のころは、言葉が遅くて、いつまで経っても何を言っているのか分からなかったっけ……車に乗せると、すぐに気持ち悪くなって、しょっちゅう吐いてたな……今は何とか十人並みの器量になったが、小さいころは、呆れるほどのブスだったな……色々なことがビールの泡といっしょに浮かんできて、言う所の「感慨深い」という心持ちにはなるのだが、自分の心をどう覗き込んでも、やはり淋

しさはやってこない。

すると、今のこの「感慨」というのは何なのだろう……急に理屈っぽくなって、またもう一杯、娘の注いでくれたビールを受けた。

その一杯を飲むうち、それはやはり、時の流れの速さというもののへの詠嘆なのだろうという結論に落ち着いた。

先月もこの稿で、時の流れについて書いたが、このごろ年をとったせいかな、何かにつけて時期とか時空というものについて考える。

もちろん、父の記念館の二十周年とか娘の結婚とか、様々な節目がやってきてそうさせるのだが、来年は私も還暦である。

三十代、いや四十代のころでさえ、還暦というのと、もう相当な老人という印象だった。

その年に自分になる……もちろん、老人とか爺さんとかいう自覚は毛頭ないが、これで孫でも出来たら、本人がどう足掻こうが、立派なおじいちゃんである。

この間も、ある編集者が、

「すぐにもう、お孫さんですわね」

と、実に嬉しそうな顔をした。彼にとって、私に孫が生まれることそれ自体はそんなに嬉しいはずがない。私がおじいさんになるのが、嬉しいのである。

（孫はまだ当分勘弁してほしいな……）

私の願望をよそに、娘の頭は結婚式のこと一杯である。

両家の結婚披露宴という形ではなく、自分たちの友人を中心にした寛いだ楽しいパーティーにしろと、すべて任せてあるので、本人たちの準備が大変らしい。

ウェディングドレスがどうだとか、引き出物はどうしようとか、招待客の人選がまとまらないとか、家にある紅茶のセットは持ってつてもいいかとか……山積みの懸案が、次から次へと口を衝いて出てきてこちらの応答も忙しいのだが、とにかくまあ、彼女にとっては今が一番いい時期なのだと思う。

結婚式の準備も大変だろうが、それから先

は、その何十倍、何百倍も大変である。

お互い、気に入らない点も見えてくるだろうし、結婚前は見えていても許せた欠点が許せなくなってくるかもしれない。経済的に苦しい時期がくるかもしれないし、夫婦あるいは子供が大病するようなことがあるかもしれない……嫌なことや苦しいことは、いつか必ずやってくる。

ふと気がつくとき、今は幸せ一杯の娘に向かって、そんなありきたりの説教をし兼ねないほどビールの酔いが回っている。

これはいかんと思い、先に寝るよといって立ち上がった。それくらいのこと、娘にだって分かってはいるはずだ。

だが、時の過ぎるのがこれほど加速度的に速まるなんて、今いくら言ったって分からない。私自身がそうだったように、ある程度年をとってみないと分からないことなのだ。

ベッドに入って電気を消し、目をつむりながらそう思った。

（了）

平成 新訂 諷 誦 撰

待望の回向文集、諷誦文集ができました！

『新諷誦撰』刊行から十一年。

今ここに、『諷誦撰』が生まれ変わりました。

新作、口語調など多数加わり、

従来の文章も整理して、

より一層充実した諷誦撰ができました。



上製・布クロス貼り

定価2,700円 (税・送料込)

◇内容を再吟味。回向文とは何かから考えました。

◇サイズは従来通り、持ち運びに便利な大きさ。

(タテ一九センチ、ヨコ八センチ)

◇総ルビ付。

監修 大室了皓／大谷寿雄／山本康彦
編集 ふじゅせん刊行会 代表・長谷川岱潤

お申し
込み先

ふじゅせん刊行会

〒141東京都品川区上大崎1-9-11 (戒法寺内)

TEL:03-3441-8971 FAX:03-3441-8702

郵便振替0015-8-158563 ふじゅせん刊行会

うまい野菜と

料理の話⑥



あるいは

セ
ッ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな
愉しみ

我田大

新潟県魚沼のこのへんでアオナ（青菜）とか三月菜とかいつている菜っ葉がある。わからない人はまあ小松菜の親戚のようなものと思ってください。これは雪国の住人にとっては特別な印象のある菜っ葉です。名前も普通名詞が固有名詞になっているほどです。今では、印象があつた、と過去形にしたほうが正解かもしれないが、大崎菜とか大月菜のように、生産地の名前をつけた名産品もあるくらいです。新潟県には他にも長岡菜とか女池菜など土地の名をつけたのが多くある。ほかの県でも雪国にはこのアオナに似たようなものがあるのは聞いたことがある。

アオナは九月の中旬に種を蒔く。成長とともにウルノイで（間引いて）最終株間20cmほどにする。雪が降るまえに十分大きく育てておく。売っている小松菜より二まわり三まわりくらい大きい立派な菜っ葉にする。

そこで収穫して食うとこれがうまいのなんの、かと思うと違うのです。二十年ほど毎年作っている私ですが、未だこの時期のアオナ

は食ったことがない。晩秋には他に野沢菜、高菜、広島菜、白菜などうまい菜っ葉がいっぱいあるから、ではない。テンから食うものじゃないと思ひこんでいるのです。

じゃあどうするのかというと、その立派を雪の下に埋もれさせてしまうのです。雪といつてもこのへんは半端じゃなく降る。ふつうで2m弱くらいか。早ければ十一月末に、遅くとも十二月中旬くらいには根雪となる。その雪は人工的努力（物理的に取り除く、水をかける、表面に土や灰などの黒いものを撒く、とか）をしなければ、早くても四月上旬にならなければ消えない。遅ければ五月になつても残っている。

アオナは生えたまま、その雪の下天然冷蔵庫に埋めて、冬、野菜のない時に掘り出して食うのだらう、と思うかもしれませんが、これも違います。（キヤベツにはそれ用の「雪下カンラン」というのがあるが）雪国では冬の野菜は秋にとりいれたのをそのまま保存したり（「囲う」という、堀や妾ではないが）

漬け物や乾物に加工したりしておく、おいた、のです。

このアオナは雪の下で腐ることもなく生きていて春になって上の雪がなくなると、花茎を伸ばします。これこそがめざす食用部分なのです。今はスーパーなどに行けば真冬でも緑色野菜を買うことができます。が、昔は雪国の早春の食卓は保存品ばかりで皆が新鮮野菜欠乏症にかかっていた。野や山は雪におおわれ、家の中は屋根から下ろした雪にかこまれて真っ暗な冷蔵庫状態。今でこそ暖房が行き届いた高床住宅が多くなって観葉植物なども置いておかれますが、当時は冬は、目にはいるかぎりの景色に生きている緑色はなかった。景色はすべてモノクローム。おかげで精神もモノクローム。逆にいうと緑にたいして冬中禁欲している、させられている状態で、緑したくてたまらなく（ヘンな言い方）なっていた。そこに来るのがこのアオナだったので。「アオイ菜っ葉」が固有名詞になるゆえんです。

そんな、緑色野菜くらい、よそからもってくればいいじゃないかと今考える人もいるかと思いますが、当時は交通機関は発達していなかった。とくに冬は積雪によって自動車交通は途絶した。鉄道はようやく通っていたが豪雪になると除雪が間に合わなくてしばしば止まった。積雪で電線が切れて停電もしよっちゅうだった。すなわち冬の生活は、ほぼ江戸時代同然だった。後に江戸後期の当地の人鈴木牧之（すずき・ぼくし）の「北越雪譜」（ほくえつせつぶ、岩波文庫などにある）を読んだら、そこに書かれた生活は昭和二十二年生まれの私がほとんど実際体験したことばかりだったくらいです。

また食べたいからといって皆が金を払って野菜を買うほど余裕があったわけでもないし、第一買うという発想がなかった。野菜も含め食料は自前でなんとかするものであった。冬は秋野菜の保存で、次にはどうしたら早く緑色野菜を食えるかについて知恵をしばったのだ。春になって雪が消えてから種を蒔いたの



では遅くなるから、秋のうちに蒔いて越冬させ、雪消えとともに収穫することを考えついたのだ。

次は雪をいかに早く消し、温度を上げるかだ。ビニールのない昔でも考える人はいるもので、畝の間に暖かい湧き水を流して雪を消して早出しをした。これは緑に飢えた雪国人の欲望にかなって、生産者はけっこう現金を得ることができたという。大崎菜はかつてこの独特の水掛け栽培で有名だった。

現在はビニールハウス利用で早くも正月頃から商業生産のアオナが店頭に出ています。

色も黒いようなぴかぴかした緑色をして、30cmほどの長さに揃えられ結束されています。

このミタドコ（見た目）のいいのは緑色欠乏症としてはつい買ってしまう品です。でも、食ってみると失望することが多い。自分の家の雪の下から出てきた味の記憶と比較するか、あ・ちがう、と思ってしまう。

何ヶ月か遅れて実際に自分ちのを食うとその差がはっきりします。家のは追肥の化学肥

料をやってないので形は小さいし、色も、どぎつくない白っぽい緑色ですが、一本ずつちゃんと蕾がついています。食えば、売っているののセールストーク「このホロ苦さがいい」という、苦味などありません。あの苦味やざらざらした味は、窒素肥料や土壌消毒剤に由来するものでしょう。それを風味と誤解している。

自家産はすべすべして柔らかな食感もやさしく、独自の香り高く、いいです。このうまさなくして誰がわざわざ作って食べようとするでしょうか。

最近では、野菜の見た目とか栄養とか安全についてはよく言われる。でもこの本来のうまさや議論にのぼることはあまりない。ないはずです。多くの人はそのうまさを体験してみようがないからです。そういうのがあることも知らない。そういう世間のしくみになっている。百姓はよごれる職業だから自分でするのはいやだが、議論は得意でうまいものは食いたいという人は多くなっている世の中でも

ある。論議などしなくても動物になつて両者を並べて食つてみれば舌が味覚が、どちらがうまいかを素直に指し示すのですが、そのうまさを大切にして野菜を作るような、また流通させるような世の中とかしくみを、このクニの人々は作つてこなかった。ミバのよいもの、作りやすいものを作る、旬より早出しする。都市近郊は畑をやめて宅地にする、連作推進の指定産地制度、安いから輸入するなど、野菜のしぜんな「うまさ」と相容れない方向に疑問も持たなかった。

よけいな談義をした。そのついでにもう一つ。このアオナの仲間の総称「臺菜」（とうな、花茎「臺」を食べるところより）を市場では音が同じだし冬から早春のものだからといって、勝手に冬菜と表記しているようだ。何の権利があつてそうするのか、しかも重箱読み。とんでもないことだ、と言おうとしたが、結構なことだと思ひ直した。うまくない、生産

者は金儲け用、消費者はアタマで食う用のトウナがそういう表記なのだ、と思えば済む。かえつて自ら名乗つてくれて有難い……。

と書いているのは実は三月の半ばです。まだ1m以上あるアオナの上の雪を掘つてどこかして、やつと顔を出させたところですよ。一日も早く食いたいためもあるが、冬籠もりでなまっただ体の準備運動のつもりもある。青空の下で、寒くない中で体を動かすのは何ヶ月振りかの気持ちよさだ。

重く冷たい雪（しかし断熱材でもある）の下から姿を現したアオナの、去年大きくのびた葉は無残につぶされている。が、黄色い芯は生きている。これが春の強い光をあびて順調に成長してくれば、この雑誌が出る頃には、浸しに、汁の実に、胡麻和えに、漬け物にと、この時期だけのうまさをタンノーしているはずである。

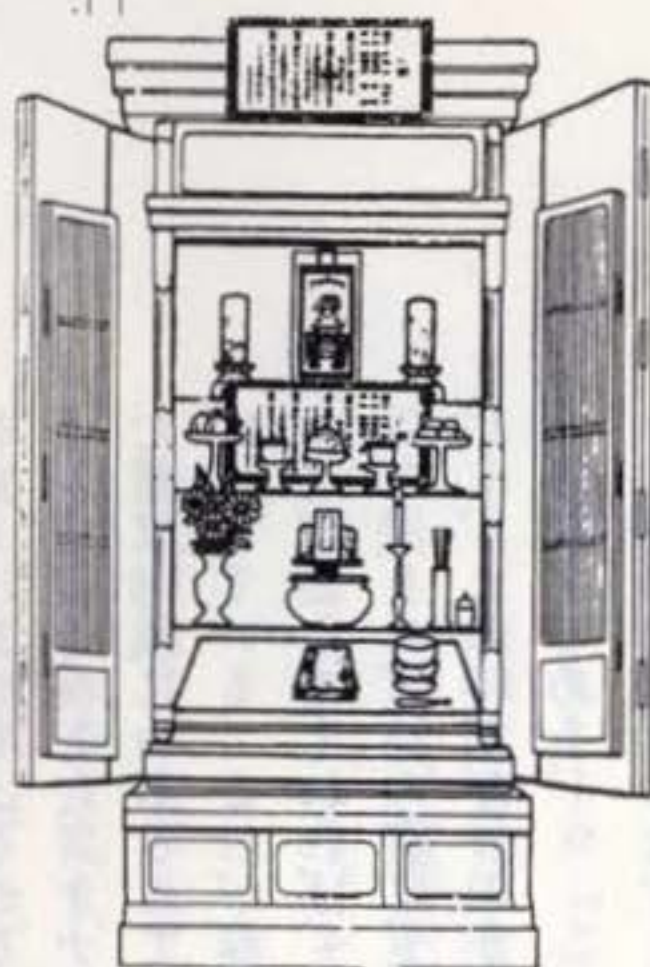
好評
発売中!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

鐘の並月

長野県・西教寺寺庭

代泰中西

最近発行された地元商工会のパンフレットに、当山に関する次のような伝承がのせられていました。(別紙)

この話は、当山の住職も寡聞にして初耳だったので、これ以上のコメントはないのですが、文中の鐘はどうなったのでしょうか。実は戦時中に供出してしまい、現在はありません。今の鐘は昭和四十九年に、檀家より寄進されたもので、低めの中々良い音色です。この鐘は、いつどなたが来て、ついても良いことになっており、お参りの方々に喜ばれています。住職が毎月十四日につくということはありませんが、例年八月十四日に、棚経で上五明の村を回ることになっているのは、この話と関係があるのかも知れません。

遠足の 子ら鐘をつく 五月晴れ

代泰

月並の鐘（上五明）

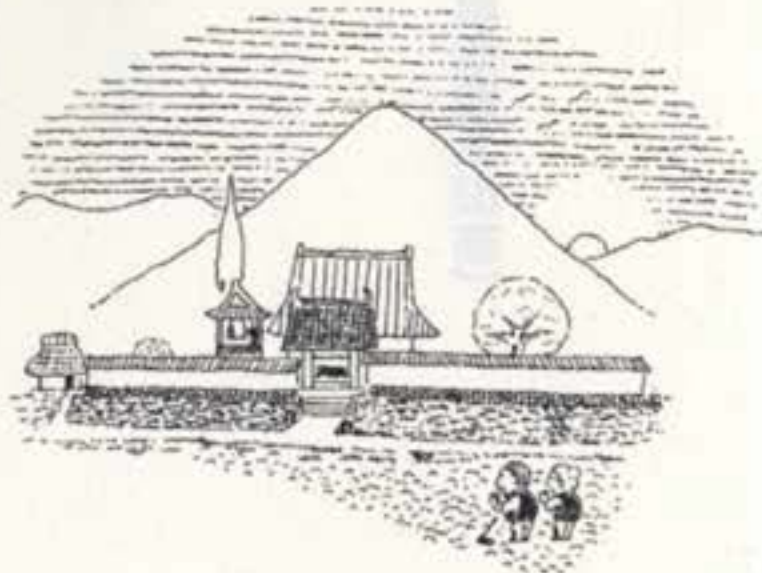
明治の初めごろまででしょうか。毎月一四日の夕方、西教寺の鐘が「ゴーン」と響きますと、田畑で働いている大人は手を休め、西の空に向かって手を合わせて念仏を唱えました。遊んでいる子どもたちも、大人のまねをして手を合わせていました。

江戸時代、上五明は松代藩の領地でした。よそからやってきて、かってに村に住みつくことは禁じられていました。ところがあると、修験者（山伏）が娘を連れ、河原に小屋を作り住みつきました。村役人は藩のきまりを話し、追い払おうとしました。行ってみると山伏はるすで、娘がいました。娘は少し待ってくれといいましたが、そのままにしておくと、殿様から叱られます。そこで小屋をこわし、住めなくしてしまいました。

やがて戻ってきた山伏は、かんかんに怒って江戸へ帰っていききました。そして幕府に上五明の村を訴えました。幕府から松代藩に、上五明の村を厳しく取り調

べするよう命令が出されました。藩ではその命令に反対することはできません。村の代表一〇人を呼び出し、取り調べた結果、田畑や家を取り上げ、貞享三年（1686）八月一四日、死刑にしてしまいました。小屋をこわしてから二年半後のことでした。これは今から三〇〇年以上も昔のことで、ちょうどこの年の秋、松本では有名な加助騒動がおこっています。藩のきまりを守ったため、藩から殺されてしまうなんておかしいと思いますが、殿様より江戸の將軍の方がえらかったので、どうしようもありませんでした。翌年の一二月、藩ではさすがに気のどくに思ったのか、取り上げた家や田畑を殺された人の子どもたちに返しています。

西教寺ではそれから毎月一四日、処刑された時間に供養のため、一〇回の鐘をつくようになりました。村人は鐘の音を聞くと、村を代表して死んだ一〇人が極楽に行けるよう、手を合わせていたのです。そしていつしかそれは「月並の鐘」といわれるようになりました。



坂城町商工会発行パンフレットより

夏

誌上俳壇

さつき咲く専修の庭に念佛のこえ（専修寺五重相伝会）

なほ避難テントに暮らし葉桜に（須磨区桜公園）

羅災の荷積む居間狭く春ほこり

山田瑞邦（兵庫県神戸市）

蛭汁僧の猥談続きおり

墓地裏を赤子這ひ出づ雨上り

佐藤雅子（山形県上山市）

三人の一人聞き役水中花

嫉・妬・恨・嘘・畏・謀議水中花

みずすまし水の輪ゆるくほぐれそむ

どの路地も祭囃子の中にあり

礎登る影の先ゆく日傘かな

戒名の二十一文字苔の花

児玉仁良（埼玉県入間市）

堀内綾子（東京都小平市）

松本厚子（東京都町田市）

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもっともっとたくさん作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

- 1 随筆・歌など……四百字詰め原稿用紙十枚以内
- 2 俳句・短歌・川柳など……四首まで
- 3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

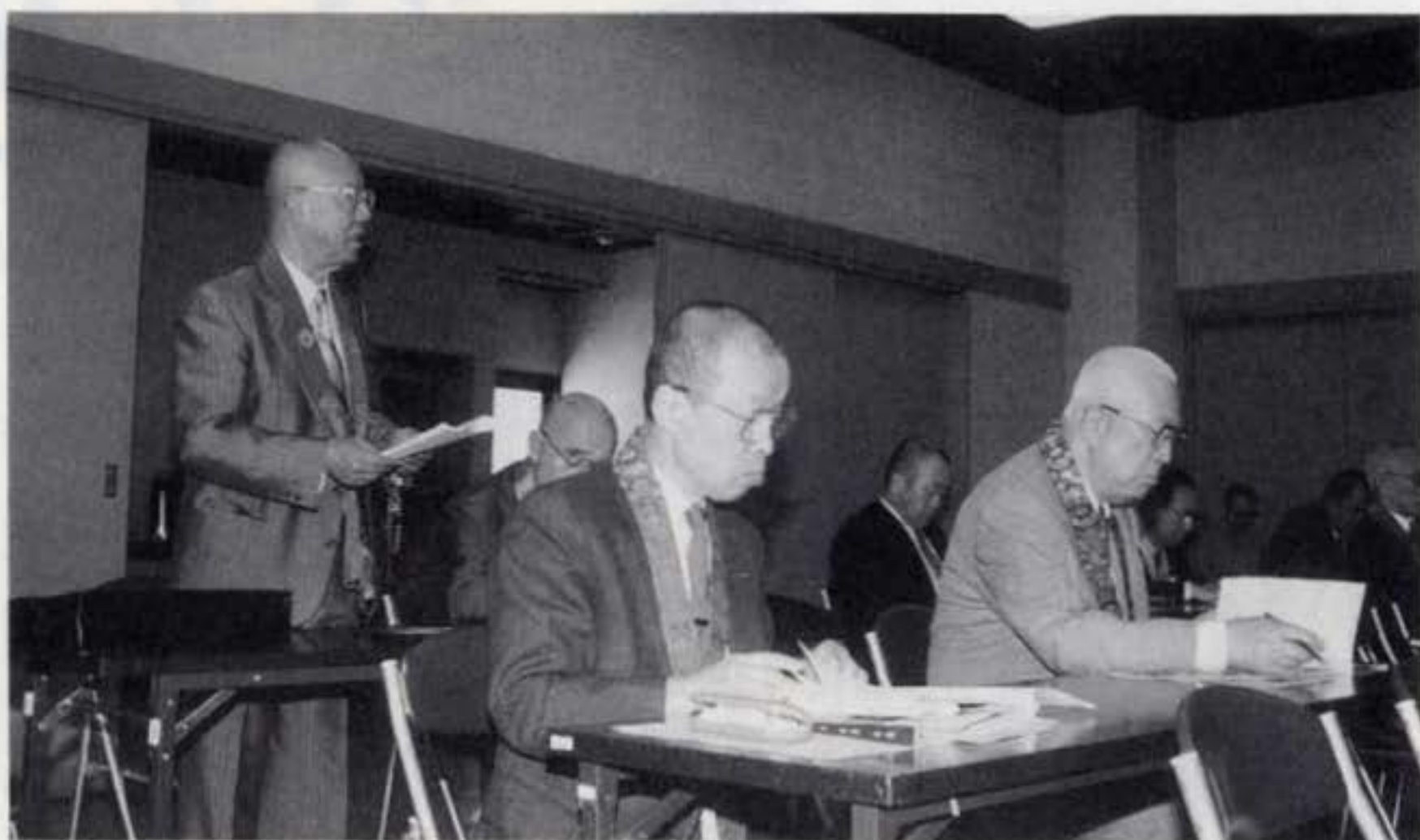
編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

- 1 七月号でもっともよかった記事。
- 2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。
- 3 法然上人鑽仰会の活動として望むこと。
- 4 その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員紹介（敬称略、順不同）

購買会員

奈良	第六組	宗運寺
東京	城北組	仁寿院
東京	城北組	林宗院
滋賀	甲賀組	大福寺
千葉	君津組	湊濟寺
山形	東北中組	誓願寺



●総会のご報告

去る五月二十九日、法然上人鑽仰会定例総会が大本山増上寺慈雲閣にて行われました。

佐藤行信議長の進行により次の議案が承認されましたのでご報告申し上げます。

①平成八年度事業報告及び収支決算報告

②監査報告

③平成九年度事業計画及び会計予算

④会長選出

会長には真野龍海副会長が新会長に就任されました。

なお、真野会長の就任に伴い役員に変更がありましたのでお知らせします。

樋口事務局長が監事及び営業本部長（新設）に移動

佐藤良純監事が事務局長に移動

総会終了後、辺見 庸先生による講演「物食う人々」をめぐって」を拝聴しました。

この講演は本誌八、九月号に掲載予定です。



テレビ画面ペットが育つキョウチクトウ 岱潤

これは、「テレビ画面ペットが育つコンチクシヨウ」をもじった駄句である。テレビ画面でペットを育てるというゲームのCMを見ながら、思わず叫んでしまった。

今年の二月から三月にかけて、『タマゴッチ』なるおもちゃが大流行し、暴力団が恐喝までおこす社会現象になった。これがいればペットを育てるゲームの走りであろう。女子高生を中心に大人から子供までが夢中になり、二千円足らずのこのゲームが、一時は何万円にもなつて闇取り引きされるほどであったという。

最近はこのブームも少しは覚めてきたようであるが、この間とても大きなショックを受けてしまった。それは二十七歳の女性が子供の出産と入れ替わりに命を落としてしまったご葬儀の席、夫をはじめ親戚、友人等その場に居合わせたすべての大人が声を出して大泣きしているその中で、幼稚園児と思われる親戚の子供であろう二人の姉妹がこの『タマゴッチ』をやりながら、ケラケラ笑っていたのである。私自身信じられないこの子供の心情は、隣人の心の動きにまったく心が動かなくなる『無漸無愧』という、釈尊がもつとも劣悪とした心になつていたのではないだろうか。

最近のゲームがすべての原因だなどと言うつもりは毛頭ないが、子供たちの心の形成に影響を与えている事は事実であろう。故林竹二師がよく言われた言葉を思い出す。「かえるの子がかえるてあるようには、人間の子は人間には育たない、人間として育てて初めて人間となる」

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十四巻七月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成九年六月二十五日
発行——平成九年七月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社シー・ティー・イー

〒一〇五 東京都港区芝公園四丁目一七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六

1997年 黒ラベル宣言 発売20周年

もっと、ピヤホールを生へ。



新登場



ピヤホールを喉ごし

サッポロ〈生〉黒ラベル

さらにおいしくなって新登場



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



●ご協力のお客に自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。
サッポロビール株式会社

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できたと。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上がり。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の声が聴こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載[※]。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo:シーマ41ℓV ボディカラーダークブルーイッシュブラックツートーン(P) (※4S9・特別塗装色) 本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 **NISSAN**

人間のやさしさをクルマに。